

新刊紹介

神典序説

大倉精神文化研究所編

數年來澎湃として勃興し來つた國民生活指導原理としての日本精神作興運動の基礎的要事として、大倉精神文化研究所では、さきに古事記、日本書紀を初めとして古語拾遺、宣命、令義解、律延喜式、新撰姓氏錄、風土記、萬葉等の我國古典を一般に普及せんことを企圖した。即、是等漢文體の、或は眞字を以つて記るされた難解の書を讀み易き國文に書き下して一纏めとなし「神典」と名稱して、之を世に送つたのであつたが、更に、此度、その「神典」の精神を理解し易からしめんが爲に「神典」の執筆者乃至此の方面に於ける權威者に依頼して是等古典と日本精神に關する講習會を催し、更にその徹底を計つた。本書はその講習會に於ける講義筆録である。現今、大多數の人は時代をばるかに隔てた是等の書に直接、接するとき、それが如何に「神典」であらうとも、例へばそれが「邦家之經緯、王化之鴻基」と云ふが如きものであつてもそこに含まれてゐる古人の精神に直接觸れ、之を誤らずに容易に理解すると云ふこと

は恐らく困難な事でもあらう。是等貴重なる古典の精神を正しく汲みとり得る爲の案内者とし、指導書として本書は誠に時宜を得たものと云ふべきであらう。

(菊版二四四頁、頒價一・二〇)(A)

日本文學評論史

久松潜一氏著

古代中世篇、及び近世最近世篇の二冊、約千五頁より成るその尠大な勞作に先づ驚嘆せざるを得ない。しかもなほ著者の日本文學評論史は近く次に出づる筈の、第三卷の總論、形態篇を加へて漸く完結するもの、如くである。序によれば本書は大正十三年四月以降、昭和二年三月迄、三ヶ年間に亘り東大文學部に於いてなしたる文學評論史の講義にその後補訂を試みつ、昭和五年末一先づ纏められたものを此度上梓せられたもの、如くである。從來、國文學に關する評論史を試みたものが無いと言ふのではない。各部門に亘つて著書なり、論文なり、發表されたものは随分ある。がその多くは或は歌論に、或は俳論に、能樂論にと云へるが如く部分的に局限されたものであり、また偶々藤岡博士の日本文學史の如く國文學一般に亘つたものがあつても、或は時代的に言つて江戸時代に終り、或はその論考が大綱を叙するに止まるとも言ふべき憾みがない譯でなかつた。本書は斯かる部門的に局限することなく、又、時代的にも古代より明治時代に及んでゐるものであり、其の叙述も亦精細である。本書はたゞに、從來の、著者自身に於ける日本文學評論史

研究の集大成と言ふばかりでなく、同時に學界に於ける此種研究の集大成である。而して本書に於ける研究態度については「文學評論の本質もしくは精神を文化史的な背景のもとに扱ふものであつて各形態相互の關係の上にたち文化史全體の影響を顧慮し乍ら考察する」ものであり、よしそれはある視角からは缺陷を有ち、萬全を期し得られないにせよ、これこそ「評論史の精神をとらへる爲には必要なる方法」であると言つてゐる。斯かる方法のもとに日本文學評論の變遷を古代（平安朝時代）中世（鎌倉、室町時代）近世（徳川時代）最近世（明治時代）の四期に大別し、浪漫主義的（ものゝあはれ）な古代から象徵主義的（幽玄、有心）な中世に、更にその中心を素朴な理想主義（まこと）と功利主義（勸善懲惡）の立場に有つ近世への發展。更に一轉して最近世に於ける寫實主義への變遷に及ぶ過程を精細に、實證的に論じたものである。その外に附録として昭和五年末迄の日本文學評論史に關する論文要目及び著者久松氏の發表論文目録を項目により各時代に分類して掲載してゐる。（菊版、通一四八八頁、附録一七頁、東京、至文堂發行、價、各六・〇〇）（A）

日華佛教研究會年報

第一年

一昨年末設立された日華佛教研究會の最初の年報である。同會は昨年六月訪華團を組織して南北支那の各地に寺院、蓮社、居士林を尋ね、彼地の代表地僧俗と面晤交驪、日支佛教徒の提携に大なる役割を演ぜられたものである。本號は特に現代支那

佛教研究號として訪華された諸學匠の文が先づ卷初に見ゆる。「支那現今の淨土教」（林彦明氏）、「民國現代の唯識教學」（小島惠見氏）、「居士佛教に就て」（禿氏祐祥氏）、「支那密教の現状について」（吉祥眞雄氏）、等であり、法華法師の「中國佛教の現状」は嘗て海潮音第一五卷に掲載されたもの、日本譯である。近年陝西西安に於て磧砂版大藏經が発見されたことは、獨り日本にのみ傳はつてゐると致へられてゐたことであるから、佛教學界の深き興味を惹いたことである。

最近該藏經が影印宋磧砂藏經として刊行せられ、その跋文を集めたものが本書に見ゆる的屋勝氏の「影印宋磧砂藏經尾跋集」である。金刻大藏經の現存は勿論、その雕印すら殆んど致へられなかつたものであるが、それが昭和八年山西趙城縣廣勝寺に見出されたことは磧砂藏經の場合とともに支那佛教界最近の二大発見と稱すべく、現在、宋藏遺珍としてこの金刻藏經中の重要なものを見得るは喜ばしきことである。塚本善隆氏「金刻大藏經の發見と其の刊行」は該藏經の發見始末、それに就ての報告研究文の概略を要領よく論述し、併せて該藏經の大藏經版史上の價值にまで論及された勞作である。鈴木大拙氏「禪宗の初祖としての達磨の禪法」は支那初期禪宗史研究の指針とすべき卓見であり、胡適氏「楞伽宗考」は國立中央研究院歷史言語研究所集刊第五所收の譯文である。次に「入元僧廿五世古源和尚邵元とその撰書の元碑」（塚本善隆氏）の研究文が見ゆる。「淨土宗要典目録」梅光義編、「支那佛教關係雜誌論文要目」等が研究

究者に便を興ふること多かるべく、其他訪華團の旅行文が收められてゐる。卷末に見ゆる春日禮智氏「全唐文佛教關係撰述目錄」、岩井諦亮氏「宋代新譯經索引目錄」は佛教史料の整理にして、學究に便益すること多大なるものあるを思ひ、かゝる基礎的研究に精進された努力を深謝す。(菊版四百餘頁昭和十一年八月刊、價貳圓六拾錢、靈文堂發賣)——(野上)。

教行信證講話

大須賀秀道

教行信證は宗祖親鸞の教義的思想大系にして、日夜これをもとく宗學者と雖も、其の眞精神に直參する事の困難なる一宗教的體驗の書である。されば況やこれを宗教的素地なき一般大衆に了解せられ得べく聞かしめると言ふ事に到つては、蓋し難中の難事であらう。然るに著者はこれを敢て爲し、而も僅か六回の放送に於て祖聖の宗教的本質内容を、一般民衆と共に味はひ共に語られたのである。

大方教典の放送と言ふものにして、多くの講者は其の教典の文字にとらわれ、字句の解釋に終り、斷片的に又は抽象的に全く自己陶醉に終るものである。それに反し、大部なる六卷を擧げ來つて、いさゝかも前表の如き失に陥入らず、深き蘊蓄を熱烈なる信仰の坵場に投入咀嚼して統一的にしかも平易にそれを語つて近代人の精神をヒリリツとさせるのは此の著者にして始めて爲し得られた事である。以下目次を掲げるならば

第一講 眞宗の根本聖典。

第二講 大無量壽經の宗教。

第三講 他力廻向の大道。 第四講 横超の金剛心。

第五講 大涅槃の妙果。 第六講 三願轉入の告白。

以上の目次に依つて、想像せられる如く、第一項に於て教行信證の占むべき地位を序説し、第二講は教に就て述べ第三講は行に就て、第四講は信に就て、第五講は證に就て、第六講は眞佛土化身土卷に就て述べられ、しかも各講の初めには簡にして要を得たるテキストが附されてゐる。全篇流暢なる表現にして、一切經の歸趣たる教行信證が平明に我々の胸奥に滲透して來る。眞實を求むる者の一讀すべき絶好の書である。

(四六版二四二頁。發行所、京都市正面烏丸東法藏館。定價金壹圓貳拾錢)。(工生)

正信偈讚仰

曉 烏 敏

本書は富山縣圓照寺の親鸞聖人六百五十回遠忌の記念講演に、六回に涉つて講述せるものである。開卷に正信念佛偈が漢和對照的に掲げられて理解を便ならしめ、その内容に入るや特に速如上人の正信偈大意を指南として、各項毎にその文が示されてゐる。これ速師の正信偈觀を知らしめられると同時に、著者一流の卓越せる信念と囁みくだいた表現とに依つて、宗祖親鸞の信心の傳統と本典二部の精要が平易了解せしめられる。

「その筋の命により本書三六、三七兩頁削除しましたから左様御承知を願ひます。」との注意がある事に依つても、如何に此の書が眞剣なる讃仰の書であるか想像せられるであらう。

吾人は此の書に於て正信偏の眞髓にふれ得るであらう。敢て本書を購読せられん事をお奨めする。

(四六版二六四頁、發行所、石川縣石川郡出城村北安田香草舎。定價、金壹圓貳拾錢)。(工生)

眞宗安心論五拾題講話

岸 本 義 導

本書は著者の亡き母君の忌辰追孝の爲と一は明春還暦を迎ふるの記念の爲、かつて觀喜誌上に連載されたものを訂正、且つ論題を増補して公刊せられたものである。その目次を挙げるならば、三信出體。三信義相。至心字調。信樂字調。欲生字調。一心義相。三心即一。三信本末。合三爲一。三願欲生。聞信同異。聞見一致。聞觀同異。信願同異。觀喜初後。轉教口稱。三不三信。二種深信。正定之業。彼此之業。行信論。念佛往生。他力信心。信心正因。信後の疑惑。往生治定。光號因緣。報恩稱名。行一念義。行信一念。一念兩釋。歸命義趣。必具名號。一多念相。十念業成。業因同異。タノムの義相。タスケタマへの義相。信歸同異。歸禮同異。一念覺不。タノムとマカセルとの同異。タスケタマへと二種深信の同異。申の義相。意業憶念。所歸入法。機法一體。佛凡一體。五重義相。平生業成。その擧げらるゝところの論題は廣く三經七祖に迄及ぼして居らぬけれども、その目次に「信後の疑惑」中の者相」等あるにても豫想せられる如く、その集むるところ教義論題と言ふものに非ずして、眞宗安心の根本的實際的問題たる安心論題にし

て、不倫不黨の中立的見地よりそれを解説せられたるものである。されば宗學研究に於ける初學者の好き指南書であると共に、布教戰線に活躍せんとせらるゝ者の必携の辭書となるであらう。御一讀をお奨めする。

(菊版、三六七頁。定價四圓。發賣所 京都市花屋町通新町西入 石田光英堂)。(工生)

谷大西尾教授編

藏梵對照翻譯名義大集

西藏語索引

今回刊行された「西藏語索引」は從來神博士によつて刊行されてゐた「梵藏漢和四譯對校翻譯名義大集」を基としての西藏語索引である、本書は其梵語の數約一萬あり、それに相應する西藏語があるのであつて、チャンドラやシュミットの辭書に無き語も多數見出さるゝ、假りに今西藏語の一字を引けば、其下に見出さるゝ「名義集」における相當語の番號が附してあり、又其西藏語に相當する梵語二語以上あるときは、一々其梵語を1、2、3、の順序に並べられてある。

猶ほ又大谷大學にある北宗版ナルタン版、萩原博士の「梵漢對譯佛教辭典」を參照すると共に、卷末の「翻譯名義集西藏語訂正表」は神博士の訂正表中のものを除外して、誤字を一々訂正して使用上の確實さ可期された事は、蓋し使用者に取つて利する處大であらう。

されば吾人は西藏語學研究者に取つてなくてはならぬ一本で

あると考へる。しかも編者の努力の大なりしに拘らず安價に極めて優雅なるプリントによつて刊行された事を喜び、敢て斯學研究の士に奨むる次第である。因に發行所は京都市上加茂竹鼻町三十四、振替大阪一〇四、九八二番、佛典研究會である（定價金五圓、送料參拾參錢）（高田）

大乘新論

泉 敬 照 著

著者は佛教學には獨自爾の研究方法あることを論じ、佛教は印度特殊の民族性を中心としての天才的印度人によつて成れる精神的傑作あるから、これを民族的に異り教理的に異るキリスト教的な宗教哲學宗教學による泰西人によつての研究は佛教で理解を得られぬのであるとする。殊に佛教は生佛不二佛子と教祖と嚴別せず、無神教唯心的色彩が著しく、宗教としての人格的内容を中心としてゐるのであるから之を全然没却して専ら歴史的興味から大乘非佛説とか大小乗とかを認識せんとする態度は誤りである。釋尊の教法は、空によつて裏づけられた法が中心になるのであつて、四諦十二因縁も空の説明である。龍樹は爾來の教祖の傳燈にとらわれて釋尊を現實化し、煩悩を墨守して之れの立場を忘れた所謂小乗の輩に對して、釋尊の根本的立場に還るために空を説かれた。大乘小乗の區別は、史的釋尊に捉らばれてその三藏を中心として法の眞精神を忘れたものに、高い立場から小乗と言はる、のであつて、大乘の立場は史的釋尊を超へ、佛と弟子との區別を超え、小乗が一佛一菩薩の教義を

絕對不可能としたに對して、自燈と法燈明の高い立場から有見を破して空へ辿らんとしたのである。大小乗を論理的に關係せしめ、机上で取扱はんとする態度は、實踐生活を忘れたためであつて、阿含が小乗であるとは體空の理に基いて開放的な諸法實相の自律的人格の上に還つた深奥なる自覺の立場から言はるのである。されば大小の區別は論理的に非ずして人格的自覺の有無にあつて決して思想上の必然的連絡はあり得ない。龍樹の思想は自己の自覺から佛祖を超え兩者には思想上の内面的有機的連絡はない。佛祖は佛祖小乗は小乗、大乘は大乘であり、阿含の中から大乘の條はなく、大乘を明にして小乗は期せずして了解せらるゝと言ふ。

されば大乘は佛祖の精神を體して、必ずしも佛祖の史的存在に囚れず、萬象の如くの體得によつて唯自己の自覺に生きる永久創造的人格の上に現はれる。萬有の眞實相こそ大乘等ば著しく法燈明に於て自燈明の内容とし、これを人格化し法身と仰ぐのであつて、法身は釋尊とは關係なく大自然に充溢する絕對生命を人格化して仰いだ姿である。かくて大乘は時空を超出し傳承より解放され、大自然を對象とするところば法大であり、四諦十二因縁の如き特定の教に拘束されぬ。煩悩即涅槃であつて煩悩に捉はれず、小乗が淫慾を戒律に於ける重大なものとせるも大乘に於ては慈悲をさまたぐる殺生に重點を置くが如き、小乗とは別個な卓越せる地位と價值を大乘に認むる。小乗は三藏と云はれて、歴史的釋尊を中心としてこれに捉はれて佛弟子を考へてゐるが、大乘は一切人を開放して佛弟子たらしめる。

著作は更に言ふ。小乗に於ては罪惡を重視して、宗教生活を拒むけれども、大乘に於ては提婆の如きも救済せられ、これらの人々をいかにして救はんかの爲にのみ大乘經典の新作ありと云はる。法華經の龍女が提記せられ涅槃經には斷善根が救はれて行き、かくて小乗經に於て排斥せられた者を救はんがために大乘經が成立したのであると見、これは悉有佛性が佛教の精華であり人類永遠の巨燈なる事を立場としてゐる事を知る。

次に大小二乗の關係に就て法華經の立場と以て述べられて、三乘方便にして方便は眞實に入つて捨てらるべきもの、即ち大乘一乘こそ眞實であり目的自體である。かくて大小の關係が方便と眞實との關係に於て見らるゝ限り大乘に於てはもう一つ新しい教學が必要となり、それ故に大乘には歴史の意味は寸毫も残らぬと云ふ。

かくして本書に於ては大乘の本質を佛祖超出におき、一般の宗教學上の概念からはなれて、教祖を相對比し偶然化してなめた立場をすてゝ、佛の地位は自燈明法燈明によつては弟子によつて與へらるゝものであり、こゝに到つて弟子は教祖を超出するのである。かくして弟子が法輪を轉じて大乘經典は無數にあり、弟子が教祖の地位に立つとき、大乘の教法は小乘三藏佛の教法とは關係なく、教祖と弟子との間に何等關係なしと見る。關係ある處は、萬法如々の理又は諸法實相に於て相觸るゝところであつて原則的には大乘其至間にも内面的關係なしと見る。こゝに大乘非佛說の理由が存し、かく教相とは別個の自燈明法燈明の世界であることを許される。

かくて諸法實相、如々の理が釋尊の自覺内容としてみると、大家が自ら教法を説くと雖も、釋尊の自覺内容を離れず、法ある處に釋尊あり法これ世尊なるがゆへに諸法實相さながらに釋尊といつてよい。かくして自ら法輪を轉じつゝ、佛說に歸した處に深き體驗と教祖への深妙の歸順あることを忘れてはならぬ。

大小乗に現實的意義を考へる時、既成的な傳統や權威に提はれずに開放と自尊と獨立との意志を提げ實相の天地に邁進する自由の人格こそ大乘徒であつて、模倣と追隨と奮闘と模索との生活を辿つて超自然的要素の下に依存的生活に甘んずるものは小乗教徒なりとし最後に著作は泰西の異教徒にゆかしい精神的遺産をふみにぢられる事を嘆き、東洋人としての自覺を大乘の上に確認してゐる。

要するに本書は「新論」と言はるゝだけあつて至る處著作の獨爾の見解が見え、東洋人としての立場に立つて研究をする事をすゝめ、傳燈や宗祖を超えて、諸法實相、空の立場に立つて始めて佛教の眞精神の具現が見られるとしてゐる。論の中にしばしば東洋人の自覺を促し求道的な熱烈な態度が見うけられる事は、單なる研究の發表ではなくし自己の求道の一副産物としての本書がある事を思はしむる。(高田)

(發賣所京都市寺町丸太町弘文堂書店)